

悲しみを抱いて

風邪をひいて2週間ほど寝込んでいるうちに、落ち葉の季節になってしまった。

鮮やかな色彩を残したまま無念に散っている葉、茶色に朽ち果てて溝にはまっている葉、振り仰ぐ青空に、花卉のように舞い散る病葉の数々。

げに我は うらぶれてそこかしこ

定めなく飛び散らふ 落ち葉かな（ヴェルレーヌ）永井荷風訳

若かったころに口ずさんだ詩句が浮かんでくる。人生の秋―いやもう玄冬というべきだろう。まさにそれから先のない季節の入り口に立っている。しかし、晩秋から冬にいたるこの季節は自然がまことに美しい。百花繚乱の春に匹敵するほどだ。私の住む東京郊外のこの地は丹沢連峰があり、落葉樹に囲まれた里山がある。華やかに装った紅葉は末期の命を輝かせ、やがて土にかえっていく。「葉っぱのフレディ」という子供向けの絵本そのものの世界だ。わが家から徒歩で5分ぐらいのところ市が「桜

みち」と命名しているソメイヨシノの街路樹に覆われた道がある。桜の季節は花のト
ンネルとなり花見客でにぎわう。四季を通じて恰好の散歩道である。私も時々漫然と
その道を歩くのが好きだ。ことに夕暮れ時、淡い虹色の空を見上げながら歩いている
と不思議なことに自分が今ここにあることの喜びさえ感じる。半世紀ちかく住んでい
るこの地がかけがえのないものに思えてくる。これは晩年に達しなければ持つことの
できない心境であろう。生きる喜びは細部に宿るのだ。

散歩道でたまに行き交う老夫婦がいる。二人は私と同じように目的もなく歩いてい
るようだ。夫と思われる男性は90歳ぐらいであろうか、背筋は意外に伸びているが
歩き方のたどしさをみればそのぐらいの年齢であろう。女性は80歳半ばかりだが
以上に見受けられる。二人は寄り添いながら、会話はあまりないようだが、雰囲気に
信頼しきった長年の夫婦の安定感がある。知り合いではないのだが、すれ違ふとき、
いつも軽く会釈をする。なんて美しい二人なのだろうと、時々振り返って眺めたりす
る。

私は一人であることを否応なく自覚する。私に連れ添って歩く人はいない。もう20年、夫が亡くなって以来私は一人だ。寂しさをかみしめる余裕もない20年だったし、自分に納得させた年月であったが、いま、どんな人生が欲しかったかと内省すれば、やはりこの老夫婦のように、何十年も寄り添った二人で、晩秋の落ち葉に舞う桜みちを歩きたかった。二人の長い道のりにはもちろん嵐の日々もあったであろう。しかし、乗り越えてこそ今がある。道半ばで挫折してしまったり、伴侶を失ったり、思い通りにいかない人生を歩まざるをえなかった人たちも多いのだ。桜みちですれ違う老夫婦は、恵まれた晩年を迎えることができた羨むべき二人である。思いもかけず人生の途中で伴侶を失うという悲しみを抱いて、絶望の中から再生にむけて歩む作家や著名人の手記を何冊か読んだ。いずれも身につまされるものであったし、相手に対する愛情の深さに胸を打たれた。その中から私の書棚にある四冊の作品について書いてみたいと思う。出版されたとき、話題に上がった作品ばかりなので、改めて触れることもないと思うのだが、私にとっては、やはり得難い内容なのでしっかりと心に留めておきたい。

『そうか もう君はいないのか』 城山三郎

東京裁判で死刑になった元総理大臣、広田弘毅の生涯を扱った『落日燃ゆ』や、やはり総理大臣だった浜口雄幸と彼の盟友たちを描いた『男子の本懐』など、伝記小説、経済小説を描いて人気の高い城山三郎は、2000年、妻の容子を癌で失った。享年68歳。46年間の結婚生活であった。学生時代にさかのぼる彼女男との最初の出会いで、彼は「天から妖精がまいおりたようだ」と一目ぼれである。26歳と22歳で結婚。容子は彼の実家の稼業である室内装飾業を手伝い、大勢の店員の面倒を見たりと、環境の変化で大変だったが、筆一本で立とうとする彼を生涯支えた。天真爛漫な性格で彼を楽しませていたし、また気遣いの行き届いた女性だったという。

その後作家として順調に歩み、子供にも恵まれ、幸福に満ちた生活だったが、彼女の体を癌細胞がむしばみ、それが判明した時はすでに末期であった。「ガン、ガン、ガンちゃん」と陽気にふるまっていたのだが、三か月と告知された余命をどうすることもできなかつた。「最愛の伴侶の死を目前にして、そんな悲しみのきわみになら

できるだろうか、容子の手を握ってその時が少しでも遅れるようにと祈るだけだった」と書いてある。年明けの2000年2月、癌と告知されてからたった4か月、夫の仕事の邪魔をしないようにと最後まで気を使っていた68歳の生涯を終えた。彼は、通夜も告別式もしない、したとしても出ない、出たとしても喪服は着ない、お墓は決めても墓参りはしない、と駄々っ子のように現実の死を認めようとしなかった。メモ魔の彼の手帳にはその日のことを、

「冴えわたる 青いシグナル 妻は逝く」 とだけ記されていた。

次の詩は人々の共感を呼び、硬派だった城山三郎の全く異なる面をみて、新たにファンを獲得したと言ってもいい位のインパクトのあるものであった。

妻

夜更け 目覚めると枕元で 何かが動いている

小さく呟く 何者かと思えば

目覚まし時計の秒針

律儀に飽きることなく動く

その律義さが不気味である

(略)

「おい」と声をかけようとして やめる

五十億のなかでただ一人「おい」と呼べるおまえ

律義に寝息を続けてくれなくては困る

彼は言う。「容子の死を受け入れるしかないとは思うものの、彼女はもういないのかと時折不思議な気分を襲われる。容子がいなくなった状態に私はうまく慣れることができない。ふと容子に話しかけようとして我に返り、「そうか、もう君はいないのか」と、なおも容子に話しかけようとする。」 城山三郎は妻容子が逝った7年後に

後を追った。朦朧とした末期の意識の中でも妻を探していたという。連れ合いを亡くするということはこれほどのことだったのか、子や孫は慰めにはなっても代わりにはなれないことを痛感したと娘の井上紀子は書いている。

川本三郎 『いまも君を想う』

川本三郎は私の大好きなエッセイストである。東京の下町を歩き、荷風の跡をたどり、情緒あふれるエッセイを数多く書いている。彼は1994年、朝日ジャーナルの記者時代に朝霞自衛官殺害事件の手配中の犯人を直接取材し、それがもとで朝日新聞社を解雇された。これからどうなるか先の読めない時期に、やはり取材先で知り合つて心を通わせあっていた武蔵野美術大生の恵子は「朝日新聞と結婚するのではありません」と初心を変えることなく結婚にふみきる。三郎27歳、恵子21歳。以後35年の結婚生活であった。彼はやがてフリーの作家となり、映画や文学の評論、エッセイなどで活躍する。妻恵子もファッションデザイナーとして名が知られるようになる。子供はいなかったが、二人で国内外を旅し、充実した人生を送った。

しかし、2007年、恵子を食道がんが襲った。手術をしたが、すでに肝臓に転移していたので抗がん剤治療をやめ、漢方に頼った。一年、二年先を考えるな、という医者宣告であった。入院を繰り返しながらも決して弱音は吐かず、最後までつらいとか、悲しいとか、泣き言を言わなかった。「家内がガンになって一番つらかったことは、それでも健康な自分は日常の時間を生きなければならぬということだった」と彼は言う。「代われるものなら代わってやりたかった」との思いは余命の定まった大事な人を身近に持っている人の共通の想いであろう。治療の方法もなく、病は好転することなく、2008年、ついに帰らぬ人となった。57歳の短すぎる生涯であった。葬儀は静かな場所で、という思いで、通夜の酒は止め、香典は辞退した。彼の納得のいく葬儀であった。なお、俳優仲代達也に触れ、同志でもあった妻、恭子（隆巴）が65歳で、すい臓がんで逝ったときのことを書いたエッセイ『妻に先立たれるということ』について次のように書いている。「宮崎恭子さんは癌の告知を受けたとき、一人でそれを受け止め、夫に迷惑をかけたくないから言わないでくれと医者に頼んだという。数か月後、医者から深夜に電話をもらい、奥様に口止めされているのですが、

どうしてもお知らせしなければと思ひまして……余命あと半年」であることを知る。仲代の衝撃の大きさが想像できる。大事な人の余命を宣告されるほど苦しいことはいという共感を痛いほど味わったという。

この作品は「看病記録」ではなく妻へのレクイエムであろう。次々と取り留めもなく浮かんでくるエピソードを淡々と綴ったもので、ほとんどが楽しかった思い出、自分を支えてくれた妻にたいする感謝の言葉に彩られている。妖精のように美しく明るい妻であり、また経済観念に優れた面もあり、彼が失業しているときも家計を支えてくれたという。映画評論にたいする彼女のアドバイス、「匿名で人の悪口を書くなんてよくないわよ、西部劇の悪人は丸腰の相手を撃つって、それと同じじゃない」。その通りだと思ひ、以後、気に入つた映画、文芸評論だけを書くように心がけたという。料理好きでもあり近所の商店とも顔馴染みだったようだ。次のようにも書いています。「亡くなって二か月ほどしたとき、行きつけの豆腐屋に行くと、おかみさんに「最近、奥さんをみないけど」ときかれた。「六月に亡くなりました」というと、おかみさん

はびっくりした。家内はよくここで豆腐を買っていて、親しく話をしていたという。おかみさんは、頬にかぶっていた手ぬぐいをとり、深々と頭を下げてくれた。私の知らない家内がいる。近所の人に親しく記憶されている。そのことがうれしかった」という挿話はさりげなく、しかしこころの洗われる想い出として読者の共感を呼ぶ。

自宅のそばにある善福寺川のほとりを散歩した日々。二人で飼いつづけた猫たちの思い出。そこかしこに漂う寂寥感は、今はない妻の在りし日をしるのことで、読後感で辛さはあまりない。川本三郎のほとんどの作品がそうであるように、透明な、昇華された美しさがある。

『妻を看取る日』 垣添忠生

これはまさに妻を亡くした夫の慟哭の書である。作者は 国立がんセンター名誉総長。東大医学部を卒業して、とある病院に勤務していたころに出会ったのが昭子夫人であった。彼女は、別居はしていてもまだ籍の抜けていない夫を持つ38歳の人妻で

あり、26歳の研修医との結婚は、彼の両親はもちろん、周囲が猛反対するのも当然であった。しかし、患者として出会った彼女を、一か月も立たないうちに、「結婚するのならこの人しかない」と確信するに至る。昭子夫人をこのように表現している。「頭がいいというのは物事を理解する力の高さだった。会話が滞りなく進んでいく心地よさ、言葉の意味することを瞬時に分かり合える喜びがあった。彼女と私は波長が完全に一致していた」。周囲の猛反対を押し切り、「傘一本を持って」彼は実家を出て、彼女の家に移り込むのである。彼女は年齢だけではなく、病弱であるというハンディも持っていた。難病である膠原病を患い、何十年にわたってステロイド剤を服用していた。次に肺の線がんに侵された。ごく小さいものだったのでがんセンターで手術をして元気をとりもどす。数年して甲状腺がんが襲う。しかし克服し、元気で国立がんセンターの総長の妻として公の場で活躍し、海外旅行もした。

2006年春、肺に再び影が現れる。陽子線治療をうけるが2007年、リンパ節に転移、小細胞がんとわかり、肝臓、副腎、脳への転移が明らかとなり、病状は一気

に悪化する。国立がんセンターの総長としてあらゆる治療にとり組むが、癌を止めることはできず、ついに緩和医療に踏み切る。2007年末、入院先から家に帰りたいという妻の希望で、医療器具一式を抱えて自宅に帰り、看護師の手を借りず自分で自分で介護する。2007年、大晦日の日に永眠。全身をきれいに自分の手で拭き清め、お気に入りの洋服を着せて納棺する。最後はしっかりと彼の手を握っての旅立ちであった。豊かで幸福な40年の結婚生活。「くれぐれも私の葬式はしないでね」と事あるごとに言っていた妻の言葉に従って、周囲の人には知らせず、事務的な手続きを一人でこなして茶毘にふした。それから彼の地獄が始まる。妻不在の寂しさで酒におぼれたが、酔えば酔うほど妻のことが浮かんでくる。グラスは必ず二つ用意した。玄関で妻の靴をみても泣き、一緒に通った道を歩いては泣き、鬱状態に陥っていた。「人生、不条理だ」「自死できないから生きている」という最悪の精神状態で三か月が過ぎる。われながらよく生きていたものと述解する。この負のサイクルを妻は望んでいないだろうと自省、克服するために妻と親しんでいた山登りを始め、カヌーに続いて居合を始める。自分の肉体を鍛えることで少しずつ再生していくのである。12

がんセンターの総長である作者の、病気に對する的確な目を持ちながら、愛する妻の癌を治すことができなかつた無念さが伝わってくる。また12歳年上の妻がいかに優秀であつたか、彼女は津田塾で英語を学び、東京外語でドイツ語を学び、東大ドイツ文学科に学士入学するほどの才女であつた。12歳年下の研修医の彼が短期間に結婚を望むほどの魅力あふれる女性だつたのだろう。この本は帯にも書いてあるように、癌の専門医である自分が妻の癌を直すことができなかつたという絶望の淵から立ち上がり、いかにして再生していったかを赤裸々に綴つた書である。そうして「この個人的な体験が同じような苦悩を味わっている癌死亡患者の遺族になんらかの役に立てば望外の幸せである」と結んでいる。

『妻と私』

江藤淳

「心身の不自由が進み、病苦が耐えがたし。去る六月十日、脑梗塞の発作に遭いし以来の江藤淳は形骸に過ぎず、自ら処決して形骸を断ずる所為なり。乞う、諸君よ。これを諒とせられよ 平成十一年七月二十一日 江藤淳」。以上の遺書が翌日の新聞

に全文掲載されて、稀にみる名文であると各界が絶賛した。盟友石原慎太郎は「彼から、諸君よ、これを諒とせられよ、と乞われて、彼を愛した者たちとして何を拒むことが出来るだろうか」と言っている。鎌倉の自宅で自殺。享年66歳であった。

江藤淳は私の青春時代の昭和30年ごろから平成11年、亡くなるまで一世を風靡した輝かしい文芸評論家であった。齒に衣着せぬ批評は鮮やかで、政治にも歴史にも確固たる信念を持つ華々しい存在であった。それゆえに晩年の、殊に慶子夫人が亡くなってからの自分の衰弱ぶりが自分に許せなかったのだろう。二人とも慶応義塾大学を卒業し、同時に結婚をした。一卵性夫婦と言われるくらい仲のいい夫婦であり、よく一緒に散歩をする姿が見られたという。しかし、平成十年九月、妻の身体に不調がでて医者診断をうけたときはすでに癌の末期であった。江藤淳だけ医者の告知をうけ、妻には知らせないという道を選ぶ。苦しみを一人で背負ったのであった。いかにして家事ができなくなるか、茶碗を、そして箸を落としてしまうのか、刻々と悪化していく病状を彼はどのように見ていたのか。平成6年、私は夫を癌で看取ったが、当時、医者は家族には真実を伝えても本人に告知はせず、というケースが多かった。その分

家族の精神的負担は大変なものである。愛する人の余命を知ってさりげなく日常の生活を送るといふことの重みは、病人と同等の肉体的な苦痛をもたらす。しかも妻を看取った後、子供のいない彼は孤軍奮闘、悲しみの中で、通夜、告別式と、葬儀一切の雑用をこなさなければならなかった。過労のなかで次第に体調を崩して、その最中に前立腺炎を発症する。一刻も早く入院をという医者の見だったが、葬儀の喪主を務めることを優先して、千人に及ぶ弔問客の対応をし、一切を終えたあとに入院。次に何としても妻の墓を建てなければという一筋の思いがあった。

葬儀にまつわる多忙な雑事を終えた後に、妻を失った絶望の日々が始まる。「君が逝くまでは一緒にいる。逝ってしまったら日常生活にもどり、実務を取り仕切る、そんなことが可能だと思っていた私は畏れを知らず、生と死の境界について不遜であった」と反省する。「胸内の悲哀は、あたかも底のない井戸でもあるかのように、（涙が）いつ汲みつくせるともしれず、決して妻を一人にしないという明白な目標があったのに、家内がいなくなった今となっては、そんな目標などどこにもない。ただ私だ

けの死の時間が、私の心身を捉る。意味のない死に向かって刻一刻と私を追い込んでいくのである。「もう何もかも終わってしまった、妙にくたびれた、できることならこのまま慶子のところに行ってしまいたい」と述懐する。心身ともに病んでいた最中、劇症の感染症のために手術をして一旦は回復するが、その後、脳梗塞を患い、妻慶子が亡くなってから八か月後の7月21日、鎌倉の自宅で自ら命を絶つ。

「花に嵐の例えもあるぞ さよならだけが人生だ」とは井伏鱒二の名言だが、愛するものに死に別れることの苦しみは、たとえ月日が過ぎていこうとも薄れることはない。歌舞伎俳優市川海老蔵が妻、麻央を癌で失ったのは今年（2017年）6月であった。闘病中に書いたブログが共感を呼び、海外でも大きな話題となった。海老蔵と麻央の深い愛は、夫婦というものの絆を改めて考えるきっかけを与えてくれた。その人の置かれている地位や知性に関係なく、人間は平等に別れの悲しみを抱いて生きていくのだと痛感する。谷川俊太郎の次のような詩がある

あなたはそこに

本当に出会ったものに 別れは来ない
目を見張り私を見つめ 私に語り掛ける
あなたの思い出が私を生かす
早すぎたあなたの死すら私を生かす
初めてあなたを観たころから
こんなに時が過ぎた今も



(2017年 12月)

